

近況・随筆

中学校同期生の進路

内藤博夫

昨年(1992年)11月29日、有志5名の呼びかけにより、八王子市内のホテルで卒業以来初めての小学校(市立第八小学校)の同窓会が開かれた。案内状によれば40年ぶりの同窓会になるという。住所が確認できる者を収録した同窓会名簿には、116名が記載されていた。そのうち出席した者は60名(男子29名、女子31名)であったから、この種の催しとしてはまずまずの規模であったと思う。当時の6年生は3クラスに編成されていた。各クラス担任の3名の先生のうち、2名の先生が出席して下さった。欠席されたのは私が属していたクラスの担任のO先生で、足の怪我のため入院中であるという。久しぶりにお目にかかれるものと思っただけに残念であった。同窓会に出席して特に印象に残ったことは、I君との40年ぶりの再会だった。I君とは同じクラスに属したことはなかったが、ひょうきん者でいつも愛嬌をふりまいていたので好感は持っていた。ただ勉強の方は振るわず、そのためもあってか時々いじめにも会っていたようだ。その彼が笑みをたたえながら近付いてきて、最近の生活ぶりを話してくれた。それによると、彼も人の子の親となり、人の命を預かる路線バスの運転士になって働いているという。そして円満な家庭を築いていくことが生きがいの一つになっているというのである。この日は古い友達と旧交を暖めることができ、有意義であったが、とりわけI君の成長ぶりには感銘を覚えたのだった。

小学校と道路を隔てた斜向かいに私が卒業した中学校(市立第一中学校)がある。当時は小学校と同じく各学年とも3クラス編成だった。学区も小学校と同じだったので、八小の卒業生はそのまま一中に進学するのが通例だった。したがって小学校の同窓会といっても実際は中学校の同窓会をかかっていた。もっとも中学校の同窓会は過去に2回開かれたという違いはある。それはともかくとして、同窓会の席で、I君に限らず同期の友達

がそれぞれの分野で活躍していることを知るにつけ、同期生の卒業後の進路について調べてみる気持ちになった。中学校までは義務教育で、かつ八小の卒業生は大部分が一中に進学するのだから、卒業後の進路が問題になるのは中学校からといっても差支えない。そこで一中の卒業生要覧を使って同期生(昭和30年3月卒業、男子73名、女子72名、計145名)の進路を整理してみた。それによれば、高校進学者は男女計で71名、進学率は49.0%である。ただし高校進学者の中には5名の定時制進学・就職者を含んでいる。今日では高校進学率が95%前後に達し、事実上義務教育化していることを思うと今昔の感がある。農業従事者になった者が13名いたことでもわかるように、当時の一中はまだ農村的環境のもとにおかれていた。小学生の頃は下校の途中で桑畑に侵入し、唇が紫色になるまで桑の実を食べたりしたこともある。その後、一中周辺にも都市化の波が押し寄せてきて、校舎は住宅や工場で囲まれるようになった。

就職した者の職種の中で最も多いのは工員である。男女別では男子17名、女子23名で、女子が男子を上回っている。女子に工員が多いのは繊維関係に就職した者が多いからである。女子の工員23名のうち、実に20名が繊維関係者によって占められている。この繊維工業就職者数は女子の就職者総数(32名)の62.5%に当たる。八王子は絹人絹織物産地として知られてきた。JR八王子駅前広場には、「織物の八王子」と書かれた塔が立っている。しかし八王子織物業は昭和40年頃から、都市化の波に呑み込まれたかのように衰退に向ってしまった。今では市内で機織りの音を聞くことはまれである。言い換えれば、昭和30年当時の繊維工業はまだ健在だったわけである。同期生の進路を整理するまで、これほど多くの女子が擦糸工場や織物工場に就職していたとは思ってもみなかった。同期生の進路は、時代の変化と地域の変貌をはっきりと示してくれたのである。